

巻頭言



「水素エネルギー協会」の役割

東京大学大学院 工学系研究科
化学システム工学専攻

教授 堂免 一成
(水素エネルギー協会 会長)



2年間水素エネルギー協会の会長を務められ、また本協会の改革に尽力されました岡崎健先生の後任を仰せつかりました。微力ながら本協会の発展に尽力いたしたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

さて、昨今の国内外の政治情勢や経済情勢を見渡すと、最近「水素エネルギー」あるいは「水素エネルギー社会」に対する関心が若干薄れつつあるように感じられます。二酸化炭素排出量削減のために、エネルギー効率の一層の向上、エコ住宅や太陽電池の普及、電気自動車のための二次電池の開発等々が我が国ではブームとなり、なんとなく水素や燃料電池の影が薄くなった気がします。しかしながら、少し冷静にかつ少し長期的な視点で眺めると、現在ブームになっているような方策だけで「エネルギー問題」が真に解決できないことは明らかです。ちなみに、個人的な見解を述べさせていただければ、「環境問題」である二酸化炭素濃度増加に伴う地球温暖化はもう少し時間をかけて客観的かつ科学的に判断した方がいいように思います。

「エネルギー問題」は当然のことながら我が国だけの問題ではなく、また我が国だけで解決できる問題でもありません。人類が現在1年間に消費している約 4×10^{24} ジュールという膨大なエネルギーの大半を賄っておりかつ非常に便利な「化石資源」からの脱却は、時間をかけて着実に進めるしかありません。その移行過程で重要な役割を演じるのは化石資源と同様に貯蔵・輸送可能な「化学エネルギー」であると思います。その代表がまず化石資源からつくる水素（「副生水素」もとをたどれば化石資源のエネルギーを利用してつくる）、そして21世紀の半ばごろからは再生可能エネルギーや原子力からつくる水素ではないでしょうか。ただ、ここでいう「化学エネルギー」には水素からつくるメタノールやアンモニアも含めて考えた方がいいと思います。多分22世紀には人類のエネルギーの大半は再生可能エネルギー、特に私の個人的な趣味でいえば、太陽エネルギーを利用している可能性が高いと思います。

このように世界的視野をもってある程度長期的に考えると、「水素エネルギー」の果たす役割は今後ますます重要になることはあっても「水素」を中心とした「化学エネルギー」が不要になることはあり得ないと思われまふ。したがって、いろいろな思惑に左右される短期的な「揺らぎ」はあまり気にせず、確固とした長期的な視点に立って着実に研究、開発を進めることが我が国だけでなく人類全体の未来に貢献するために肝要だと思ひます。

今後、我が国だけでなく世界のエネルギー供給体系が「どのように変化するのか」、あるいは「どのように変化すべきなのか」ということに関しては色々な立場の水素エネルギー協会の会員各位が様々なご意見、見識、アイデアをもっておられると思ひます。しかしおそらく、正解を知っている「賢い人」は世界に一人もいないと思ひます。（知っていると思ひている“幸せな人”（失礼）はたくさんいるかもしれませんが。）

「水素エネルギー協会」がこのような様々な意見を自由に交換し、世界に先駆けて、より良い将来を選択するための研究・開発を促進する一つの「信頼すべき発信源」になることができれば、素晴らしい発展だと考へています。

会員の皆様の「水素エネルギー協会」への積極的な関与をお願いいたします。